

日本耶蘇會の繪畫活動と明末支那の洋畫

西 村 貞

一

偉大なる聖フランシスコ・ザベリヨが、その日本での耀かしい聖業を成就してのち、さらに支那大陸に貧寒の怙者耶蘇の福音を布かんとして百方劃策するところあつたが、此の歇むに歇まれぬ同上人の素願は、永い間、當時、印度の臥亞や馬刺加地方に駐在せし葡萄牙官憲の阻止するところとなつて、彼等の爲めに種々の妨害をうけ、遂にその計劃をして挫折せしめらるると同様の悲運を招いて、空しく南溟の孤島上川島に歸天するに至つた。

しかしながら、ジェンキンスの支那に於ける耶蘇會士とツールノン主教の派遣一八九四年倫敦刊に據ると、これは東洋に於ける布教活動の初期の歴史に於いて寔に悲しむべき重大事柄たるには相違なかつたが、それと同時にまたザベリヨの遺志を繼承して大陸に基督教信仰を扶植せんことを念じながらも、四圍の事情に制せられて一時逡巡してをつた其の後繼者達に對し、却つて彼等をして感奮興起せしめる一の新しき要

因ともなり、一層力強い活力を與へる源泉ともなつたのだと曰はれてゐる。支那に對する布教事業の開始が、アレツサンドロ・ワリニャーノによつて着手せられたのはザベリヨ滅後約三十年を経てのことである。ワリニャーノは天正七年巡察師父としてわが國に再渡するや、島原半島の口之津に在留教父を集めて會議をひらき、その席上、夙に日本人の優秀なる性情を看破してゐた彼は、將來、日本に於ける傳道は、日本人司祭を以て當らしめざるべからずと信じ、宗教的高等教育機關設置の必要を力説して、後年、日本文化の上に裨益すること極めて著大なるものあつたコレジオ（學林）及び西畫學修の問題に關して逸することの出来ぬセミナリオ（修學寮）の類を各地に創設することを首唱し、これが實現を見るに至らしたものは周く世人の熟知する通りであるが、彼はその日本に赴く途次、媽港に十箇月ばかり滞在して其の間支那開教を案劃し、布教上適當なる人物の派遣を當時印度の管區長であつたヴィンセント・ローデリックに要請する所があつた。この建議に本づき派遣され來つたのがミケル・ルツデエリなる耶蘇會士で

ある。ルツヂエリ一名ロゲリオ、華名羅明堅、ナポリ王國スピナは萬曆七年媽

港に著し、已にして中國の言語を學び得て廣東肇慶府に居り、保守學館を開設燕京開教略して宣教の治績や見る可きものがあつたので、仍て

上司ワリニャーノは更にいま一名の教父派遣を需むることにした。この囑に應じて印度の傳道からルツヂエリ一同僚としてその仲間に馳せ加はつたのが、マテオ・リツチ、華名利瑪竇、宇西泰氏であつた。

利瑪竇の來華の日附については、そこに種々の異説があつて確實ではないが、まづ大體においてペリオ教授の説くがごとく、像牌の鑄造年號の示す日附、西紀一五八二年八月を以て最も妥當の説と看做すべきもののやうである。彼は媽港につくや直ちにルツヂエリの片腕となつて布教に従事し、のち韶州南雄州等に至り、江西に入つて臨江南昌の二府を訪うて建安王の賓禮をうけ、轉じて南京に遊び、遂に燕京に入府して神宗帝に謁しその殊遇に浴した。平生儒服を纏ひ、教義を説くにも天主と孔子教に云ふ天帝とを結びつけて巧に人心の收攬を圖り、傍ら西洋の天算格致の學をもつて傳教の梯徑となし、敢て祿利を求めず、著はすところの書また多く華人の未だ言はざるところであつたからして、奉ずるところの教へ驟興してよく之を中土に沾染せしめることを得たが、特に明清繪畫に致せる寄與に至つても又じつに没す可からざるものがある。萬曆二十九年神宗帝に進獻せる天主圖像一幅、天主母像二幅のごときは、禮部官吏のうちには之を不經に屬するものと做して、明史外國傳に言へるが如く「則唐韓愈所謂凶穢之餘。不宜入宮禁者也」として排斥するものもあつたが、のち北京宣武門初名順承門内

東首に第宅を賜はり、その左方の淨地一區に天主堂これ現今の南堂の起原であるが正教奉褒卷下によれば乾隆四十年正月十四日火を發して烏有に歸すの建立を許さるるに及んで、他の畫像とともに

該天主堂内に供祀されしものと見え、崇禎八年麻城の人劉洞の撰になる帝京景物略卷四にも「神宗命給廩賜第此邸。邸左。建天主堂。堂製狹長。上如覆幔。傍綺疏。藻繪詭異。其國藻也。供耶穌像其上。畫像也。望之如塑。貌三十許人。左手把渾天圖。右叉指。若方論說次。指所

說者。鬚眉。堅者如怒。揚者如喜。耳隆其輪。鼻隆其準。目容如瞞。口容有聲。中國畫績事。所不及」と云つてあり、姜紹書の無聲詩史卷七にも「利瑪竇携來西域天主像乃女人抱一嬰兒。眉目衣紋明鏡涵影踴躍欲動。其端嚴娟秀中國畫工無由措手」と載せてあるが、これらの記

敘に徴するも、よしその影響が美術史上に決定的性質を持たなかつたにせよ、とにかく利氏携來の謂ゆる西域畫が、當代華人に西畫の新趣を傳へて、その製作上に尠からぬ感作を及ぼし、延いては康熙の焦秉貞、冷枚の徒の輩出を促がすの緣由となり、乾隆の在支耶穌會士による畫院開設の機運を醸成するの發端ともなつたことは疑ひを容れない。清の袁棟がその書隱叢説において西畫の手法とその法則を論じて「今所傳者。乃歐邏巴人利瑪竇所遺。畫像有勁突。室屋有明暗也。甚矣西洋之巧也。然豈獨一畫事哉」といつて、西畫に心服することの尋常ならざるさまを語つてゐるのは、またよく利氏の後代畫人の心魂を捉へて永く彼等の胸奥に生きた事實を證言するものといつてよい。

萬曆年中、徽州の墨匠程君房が梓行せる程氏墨苑には、その友利瑪竇の寄せし四面の西洋銅版畫、乃ちウィリクス兄弟やド・バツセ所鐫

の銅版聖畫が、*tiên chū* (天主)・*shìn lǐ pǔ hái* (信而步海) *lǐ tú yān xié* (一徒聞賢) *yǎn sè suēi kǐ* (嬌色穢氣) の各題下に摸刻せられ、造墨の稽式中に採擇されて收載してあるものもさることながら、先年、ラウファ博士が陝西省西安府で入手せられし畫帖 (37.1cm×27.5cm) で、六面の絹本彩畫から成立つ支那畫人の粉摹に係る洋風畫作品^{伯林大學}東洋學紀要所收「支那」も、またかかる影響の好作例として逸すべからざるものがあるであらう。

程氏墨苑所載信而步海圖 (木版)

その圖様は聖書説話に取材せるものが大半を占め、最後の藝術と科學とを象徵する比喩的群像畫の畫面底部右端に「玄宰筆寫」の落款を示し、右落款の下部には朱肉の款印が押捺されてゐるが、これは残念ながら現在では殆んど消失して判讀しがたいと曰はれてゐる。款に曰ふ玄宰はまさしく董其昌の字號であるから、同博士もまた該畫帖の畫者を董其昌に歸

して「董其昌の事歴に關する支那側の記載には、彼が西歐の文物に影響せられ、もしくは心魂を奪はれたかに述べたものは何一つ見當らぬが、北京での禮部尙書たりし地位において、利瑪竇と接觸せしことでもあつて、利瑪竇から此の畫帖の原圖を與へられたと云ふが如きことが、必ずしも有り得べからざることとは考へられぬ」とも語つてをられる。稿者は未だ親しく原本を品鑑するの機會を持たぬが、然しなが

らこれらの諸圖が宋元諸家の筆を臨撫して神氣具足し風流蘊藉當時の第一^{畫史會要}松江志と稱された董其昌の眞蹟であるとは、いかなる點からも首肯しがたい。畫面に示されたる落款にしても、恐らくは往々世上に横行するていの偽落款の類らしく推知せられるものであつて、またよし偽落款でないにしても、禁教時支那に於いては故らに著名畫人の名款を施し、以て畫蹟の眞體を隱蔽するの例があるから、從つて右畫帖

東京美術學校藏

が董其昌の正筆を以て目すべきものなりや否やは、甚だ吟味を要する所あるに似て、その點姑く之を別問題とするも、ともあれ是等の諸圖が同氏のフィールド博物館所藏支那聖母圖考^{自由論壇誌六}六八號所載に於いて詳説されし支那様式の聖母子圖^{紙本著色、もと西安府の一官紳の家にありしもの、同氏によつて明代末期の作と鑑}とともに、利氏將來の西畫にその源流を發するものたるは一點疑ひの餘地がない。かつまた例證として

本稿に挿入せし圖版乃ち聖路加をあらはす圖や基督とエムマウスの二弟子を現はす圖などを採つてみても、それらが聖書の説話よりその題材を獲來つた作品たるには相違ないのである。それゆゑに支那における近世西洋畫の流傳と、その支那美術に及ぼせる影響の始りとが、實際、利瑪竇の媽港到着を以て標示せらる可きであると云つても毫も妥當を缺くものではない。

ただここに忘るべからざることは、この利瑪竇の支那美術に寄與せる如上の貢獻の蔭に、日本耶蘇會の繪畫活動と邦人畫家の協力支援が、あづかつて大なる力のあつたことである。じつに明季の支那における西洋畫の展開に最初の礎石を置いたものこそは、ほかならぬ我が日本人畫家であつて、而も其の作品が民族的自負心の熾烈なる當代華人の間に渴仰の的となれるに至つては、まさに日支の文化交流の上に特筆す可き刮目の事象たるを失はぬであらう。

二

稿者は、嚮に美術研究第六十九號誌上に「日本耶蘇會板銅版聖母圖に就いて」と題し、上記程氏墨苑所掲の利瑪竇撰聖書說話に關聯して收められた諸圖の中、*tiên chu* (天主) の刻記ある聖母抱子の圖が、わが慶長二年西肥の耶蘇會所屬修學寮において鏤刻せる銅版畫圖を手本に、そつくりそのまま摹彫せられしものなる

圖子第二のスウマムエと督基

圖加路聖

(りよ術美教督基るけ於に那支著氏アフウラ)

ことを指摘して、聊かこの問題につき關說するところあつたが、日本耶蘇會の支那に於ける繪畫上の活動については、猶ほそれよりも以前に、利瑪竇と共に中國に這入つた最初の基督教繪畫のうちに、既に一つの重要な役割を演じてゐたことが知られる。それは利瑪竇の回想錄ベリオ氏「マテオ・リツチの時代」所引ヴェンチ代に於ける支那の繪畫及び版畫ユリ第一卷所載の中に次ぎのごとき徵證が看出されるからであるが、この記事は利瑪竇に依つて西紀一五八六年天正十四年、萬曆十四年の終り頃か或ひはその翌年の初頭ごろかに書かれたものである。

わが耶蘇會總長クロウジオ・アクワヴィイバ貌下は、宗團の諸教父に宛て書簡を送り給ひ、……また直ちに羅馬から極めて優秀なる畫家の靈筆になる救世主の畫像一面を贈り越し給へり……日本からは副管區長ガスパル・コエリヨ師がこれまたジョヴァンニ・ニコラオの手になる救世主の大なる畫像を送られたり。そは甚だ美麗なる作品なり。比律賓からは敬虔なる一長老が腕に

御子を抱き給ひその傍らに洗者聖ヨハネの拜跪するさまを描ける聖母の一畫像を送られたり。こは西班牙より齎らせしものにて色彩と形貌との生き生きしたる點に於いて稀に見るの技術を示し、もとフランシスコ・カブラル師が西班牙より來れる右聖像を該地（比律賓）の宗團に施入せしものに係れり……………。

そこで、吾々は、この利瑪竇の回想録の記事を通じて、名をジョヴァンニ・ニコラオと呼ぶ繪事に堪能なる一畫僧が、夙に天正十四五年の交に日本に渡來在留してゐて、其の作畫が支那に於ける耶蘇會の初期の布教に少からぬ裨益を與へしこと等を承知するわけである。このニコラオと及びニコラオの畫派に就いては、タクチ・ヴェンチュリ師は、その利瑪竇傳の中でまた種々有益なる記載を與へてをり、その記載は現在の吾々の知見の空隙を填めるに資するところ極めて多大なるものがあるであらう。則ち同師が羅馬の耶蘇會本部の古文書館を涉獵して手に入れられし諸史料から、以下抄出するが如き結論を導き出してゐられる。それに據ると、ジョヴァンニ・ニコラオは西紀一五六〇年^{永祿三年}伊太利亞のナポリ王國に生れ、文祿元年のころ既に日本に在つて天草群島の志岐（Kusaki）で邦人子弟に洋畫の法を指授しをり、慶長八年の頃では、長崎にあつて耶蘇會所屬の畫學校の管理者であつた。さうして慶長十八年では再び彼を長崎に發見するが、元和六年をや、先んずるころの耶蘇會名簿には、彼が媽港に當時生活するよしが記載されてゐる。また元和九年では同じく媽港で彼の名が該名簿に擧げられてゐることである。なほまたヴェンチュリ師の他の註解に徴す

ると、畫士ニコラオは長崎において修學寮内に設けられし畫學部の部長の稱號をもつてゐたとも曰はれてゐる。

天草の志岐における耶蘇會の教育施設や繪畫教育に關して、いま直ちにその傍證を把握するわけにはゆかぬが、しかし恰度文祿元年の日附を示す長崎ルイス・フロイスよりの耶蘇會總長宛書翰の一節にも、修學寮内の畫學教授の一班を報告せる箇所が見えてゐて、耶蘇會の修學寮内における畫學實習の狀況を想見せしむるに足ると思へるものがあるから、これが概要を摘録してみると、修學寮内では或る者は繪畫を修め、また或る者は活字を彫り畫圖を銅刻することを習ひ、その手藝に秀でたる點まことに三嘆に値し、而も孰れもみな極めて容易にこれらの技術を修得するに至つたと述べてあり、またその翌年の文祿二年より翌文祿三年に至る日本年報^{サトウハチロー日本耶蘇會刊行書志所引}にも、油繪や膠畫や銅版法が教授されて九州三侯使節の持ち歸れる歐羅巴の版畫などを手本にして、原畫とさして違はないほど巧なる出來榮えを示す銅版畫が作製されたとも報じてゐる。志岐の修學寮においても、また斯かる科目が教授されたであらうことは推察に難くはないが、的確に志岐で製作されたものと目し得るものは遺存してをらない。ただし文書的小立證はないが、和蘭ライデン大學所藏の文祿元年天草板ヒデスの導師としてバアドレ・フライ・ルイス・デ・グラナダの編まれたる書の略や東洋文庫所藏のドチリナ・キリシタン^{文祿元年天草學林刊}などに挿圖となれる小銅版畫圖の如きは、おそらくは此の志岐の修學寮で、ジョヴァンニ・ニコラオの指導下に銅鑄術を學べる邦人作家の手刻に係るものと推定す

聖
ミ
カ
エ
ル
像

長
崎
浦
上
天
主
堂
藏

ることが出来る。

元來、修學寮（セミナリオ）なる教育機關は傳道士の養成がその主たる目的であつて、だいたい上流子弟を收容して之に西教の大意を授けるとともに、讀み書きのほか拉丁語葡萄牙語等を教へしもので、生徒のうちより優秀なる者を擇んで別に設けられたノビシャード（修練所）に入れ、二三年嚴重なる訓練を施し、この修練所における課程を経た傳道士のうちより、さらに優秀なるものを簡拔して一層ふかく語學と教理とを仕込むところがコレジオ（學林）である。そこで修學寮の方では教課は必ずしも一樣ではなかつたらしく、前記の課目以外にまた繪畫術、銅版彫刻術、時計製作、樂器製作並びに其の奏法などの歐洲式技藝を學修せしめる所があつた。繪畫にては油繪法、膠畫法、銅版法が教授され、銅版術にては腐蝕法でなく直刻刀鐫法が採用せられた。これらは今日湮滅を免れて傳世する諸遺品に就きてみるも確認し得るところである。例へば覺王寺所藏の寺傳出山之釋迦如來像と稱するもので、そのじつ聖ペトロが赤い希臘風の外套を纏ひ、手に鍵と書冊とをもち、裸足にサンダルをつけて逍遙する畫像 日歐交通史料展覽會出品目錄には函題に山釋迦如來繪像、箱蓋の裏面に元祿十三庚辰九月十三日修復後、のことも、長命山金剛院覺王寺常住覺俊實名有辨の墨書修理銘ある旨を記載せり。のごときも、紛れもなく平筆を用ひて油繪具によつて舶載畫布の上に描かれてゐる。帝室博物館所藏の油彩大幅三殉教者圖の控寫とおもはる、同館所藏同題圖も、おなじく油繪具を以て畫布に描れてゐる。もとサン・ジャン・パプチスタ寺の遺物とつたへる本蓮寺所藏の人物圖が、所傳のごとく果して吉利支丹遺物と認め得るなら、それは矢張りまた油繪具で杉材

の板戸に描かれてゐるのである。膠畫については、浦上天主堂所藏の聖ミカエル像は最も適例であらう。大天使ミカエルが右手に長槍を把り、左手に善惡の秤をもつて足下に惡鬼を踏み躪るところである。これは鳥の子様の厚紙に地塗りを施し具入り繪具をもつて描かれてゐる。細部は、面相筆を使用して極めて緻密なる仕上げを爲し、顔料の一部分には岩繪具の類を用ひてゐる。膠畫は、油繪の重厚なる畫調に對し、やゝ輕雋纖細の趣きを與へるところから邦人作家にとつては頗る快適なる手法であつたと見えて、斯種遺品の現存するもの最も多數を算する。細川護立侯爵所藏の西洋風俗圖屏風をはじめ之と一類の諸作品、並びに松平保男子爵所藏の泰西王族騎馬圖屏風の如きは、概ね此の膠畫の體を以て描きしものである。高槻發見の瑪利亞十五玄義圖及びザベリヨ上人畫像また同手法の遺作である。銅版畫については、耶蘇會刊行書の挿圖となれるもの以外に、大浦天主堂所藏聖母子圖のごとき一枚摺り銅版畫の作例を存し、加津佐の元山元造氏所藏で淨配聖若瑟と幼耶蘇をあらはす銅版圖原板などがある。該原板は豎四寸横二寸七分厚さ約五厘の鍛製鐵板にして、板面の諸箇所には小孔を穿ちあり、鏤刻の手法は刀鐫法を採つてゐる。先年同氏の天草本渡に於いて收得するところに係り、幼耶蘇や若瑟の姿態はもとより、空中に飛翔する天童のごときも巧に刻出されてゐる。稿者は本品を實見するまでは日本耶蘇會所製の原板たることを甚だ疑問としたが、數年前實物を一見するに及んで始めて多年の疑團を氷解するを得た。おそらくは一枚摺り銅版畫の原板と信せられるが、板材は鍛製銅でなく謂ゆる南蠻鐵と

稱される鐵材と同性質のものらしく見受けられる。

天正七年ワリニャーノの勸請によつて有馬修理大夫晴信の創設せる有馬の修學寮は、規模もつとも廣大にして相當多數の生徒を收容し、之に繪畫術、銅版術を授けしことが知られるが、レオン・バジエスの所述に據れば、文祿四年ごろでは有家にもまた修學寮が設けられ、百

二十名の邦人子弟を收容

日本二十六聖
人殉教記参照せし

ことが報せられをり、クラッセ西教史に

は同所に於いて有馬侯重臣の子弟二十人あまりを養育せる旨を述べてあり、時期

と狀勢によつては生徒の收容數に多少

増減があつたもの、如くであるが、こゝ

でもまた繪畫術とくに銅版術の實習せら

れしことは、もとプチジャン司教により

マニラに於いて偶得せられ現在は浦上天

主堂の藏有に歸してゐる聖母子及び聖ア

ンナの銅版圖銘記が之を證言するであら

う。蓋し修學寮や學林の盛衰は直ちに取

つて以て教會の傳道上の興廢を卜するの指針とも目し得るから、斯種

機關の經營は教會の事業としては甚だ重視せられしものであつた。從

つて迫害の起さる度びに或ひは分離され或ひは併合されて、その所在

を轉々せしめて難を避けしめるの要があつた。かの名高い神皇正統記

の起句日本は神國なりの語を以て冒頭とせる關白秀吉の伴天連追放令

幼耶蘇と聖若瑟（銅版原板乾拓）

長崎 元山元造氏藏

が、天正十五年發布をみるや、爾後西肥におけるこれら宗教教育機關は概ね各地に分散せられて、その所在を晦ますに至つたのは絮説するまでもあるまい。乃ちワリニャーノは秀吉の激怒を百方緩和せんと試みたが到底その嚴命に抗し難きを知り、耶蘇會員の全部をあげて支那沿岸の一小島に撤去せしめ暫く待機す可きものと考へた。しかし吉利

支丹大名らは右の提案に反對せしによ

り、教父らの大部分は天草に赴き其處にてあまり人目にたゝぬやう布教に従事す

ることゝなつて、修學寮學林の類もまた

隨つて島原半島より天草の各地に移りし

が如く、のちまた再び島原半島及び長崎

方面に復位し、慶長八年の頃では有馬と

長崎の修學寮は合算して邦人子弟を三百

人以上收容せり

レオン・バジエ
ス日本基督教史

と曰はれてゐる。然るに慶長十四年の葡船マード

レ・デ・デオス號事件のため、教會もま

た財政上莫大の損害を蒙るところとなつ

て、遂に修學寮經營も困難を極めて解散の歎む無きに至り、わづかに

長崎のみに元有馬教區にありしものが移され來つて該地の諸聖人堂

殉教者の納骨堂にして長崎の舊記に云ふ妖廟東土參臺す

なはち之である。現在の春徳寺の位置にありしと傳ふ。

附近に餘喘を保つを得たが、それも同十八年の有馬直純の迫害に引續き、同十九年の大迫害に

際會して破却せられ、わが國における修學寮なるものはこの年を以て

全く壊滅し去るに至つた。

三

つぎに、慶長八年畫僧ジョヴァンニ・ニコラオが長崎に在つて、同

地の畫學校の長であつたといふヴェンチュリ師の記述も頗る重要性をもつものである。慶長八年には彼は慥かに長崎にゐたことが證據立て

られる。と曰ふのは、慶長八年長崎學林刊行の日葡辭林ポドレイに西

紀一六〇二年慶長七年四月四日附日本司教の署名ある印刷允許狀とともに、

ニコラオ・ダ・ウイーラ (Nicolao da Ulla) と署名せる彼の認可狀一

頁サトウ卿日本耶蘇會刊行書志四五頁參照が附載されをるからである。フレイタス氏の所述

岡本良知氏譯初期耶蘇教徒編述日本語學書研究五四一六六頁參照に徴すると、アジユダ圖書館所藏未刊書中

にもまた該書の一騰寫本があつて、それには「今我が耶蘇會の教父教弟らの編みたるアルハベット順に排列せる日本辭典を見て」と題せる

ニコラオ・ダ・ウイーラの西紀一六〇二年慶長七年八月四日附の通信を收

録せる由である。してみると彼は明かに慶長七八年の交にては長崎に

在留して居つたに相違ないのである。猶ほまた當時同地で畫學校の長

であつたといふ事柄も、在長崎の司教セルクエイラ慶長三年わが國に來着し同年より慶長十九年の死に至るまで日本司教として在職す享壽六十二の慶長七年度の年報オチス・ケリー日本基督教史第一卷所收の一節より十

分これを納得せしめらるる所があるであらう。このセルクエイラの報

告は西紀一六〇三年慶長八年正月の日附を示し、特に長崎の修學寮に關す

るものとは斷はつては居らぬが、前後の關係や慶長中期に於ける司教

常住の地が長崎であつた點などを考慮に入れると、それが長崎の修學

寮バジェスは慶長八年では長崎に學林は存在するが修學寮はその前年の慶長七年に有寮馬に移轉して同地には所在しないかの如く記述してゐるが、多分この點はバジェスの誤記であらう。に關する報告の一節なることは明瞭である。のみならずニコ

ラオの所管に係る畫學校なるものの狀況の一端や教課の一般に就いても、種々重要な示唆を與へる點で、また甚だ注意すべき史料たるを失はぬふしがあるから、煩を厭はず左に抄出することにしよう。

予は同宿たちのうち多數のものが拉丁語を學べるを發見せり。そは宗務上一層有用のものたらしむるに在るは論なき所ながら、また有力なる法兄弟もしくはセミナリオの生徒たらしむる爲めにも必要なりとす。彼等の大部分はこの最後に擧げし名目の下にわが耶蘇會に收容せられしものにして、予みづからも是等の同宿たちの多數を寄せ集め、彼等を予の屋舎に住はせたり。そこでは彼等は聖職者たるためには神學上の諸科目を研修し、他のものは繪や版畫を作ることが出來得るよう描畫術及び彫鐫術を學び、また日本字は勿論歐洲字をもつて印刷するための活字をも製作せり。それらは此の教會にとりては非常に須要のものなりとす。予は油繪や膠畫にて立派に設備せられし諸會堂を目撃したるが、同宿たちは實に驚く可きまでに十分その仕上げの方法を知悉してをり、彼等の多くは優秀なる藝術家なりき。靈父たちは夥しき水彩畫や銅版畫の類を配布せり。こは奉教者の獻心を呼び醒ますに與つて大なる力あり。嚮に長崎の學頭慶長十九年永逝せる前僧デイオゴ・デ・メスキタ師なるべしに依りて報告されしが如く、拉丁語日本語の書冊板行され、且つまた多數の歐羅巴の書籍及び種々難多なる宗教上の諸論文が翻譯を見、日本字を以て印刷されつつあり。

長崎に於ける修學寮の施設がいつ頃から始まるものか明確ではない。バジェスによると慶長四年と同七年とに一時天草方面や乃至島原半島の有馬方面に移されたとのことであるが、だいたい慶長十九年の大迫害までは細々ながらも命脈をつないでをつたらしく、有馬の修學寮に

比較すれば其の規模小であつた前出セルクエ
イラ年報所載と稱せられる。

有馬の修學寮にあつても諸種の畫術と銅版術とが學習されてゐたのであるから、恐らくは其處でもニコラオが教鞭をとつたであらうことが推測せられよう。バジエス日本基督教史慶長六年の條には「有馬の修院には十五人の修道者がゐて、その修院に屬する五箇所の駐在所には十一人の法兄弟が居つた。他方から來た三百人の異教徒が受洗した。

さうして其處では十四人の同宿たちが戰亂の間有馬に引込んで繪を習ひ、且つセミナリオの形式で生活し、彼等の作品をもつて日本の諸聖堂を飾つた。彼等は二人の僧侶の監督をうけてゐた。僧侶のうち一人は羅馬から來たもので、既に司祭であつた。この司祭の世話によつておもなる會堂用のオルガンや他の樂器や時計などを製つた。これらは當時の日本にあつては極めて珍奇なるものであつた。また人々は歐羅巴のものに較べてひけをとらぬほど美しい御影を銅鑄して、それを日本國中に散布した」とも述べてあるが、バジエスの語るこの二人の僧侶のうち、その孰れかが畫僧ニコラオではあるまいかといふ推測は、

この一節を讀過するにあたり誰れしも其の腦裡に想起せしめられずにはゐられぬであらう。いやそればかりではない。ニコラオの活動を裏書する有力なる證左は、彼の名が慶長期の述作と信せられる伴天連記の内にも現はれてくることである。この伴天連記の書は、新村出博士によつて慶長十年代の中頃長崎もしくは大村にて書かれしものであらう書物展望第一卷第一號所載
古逸吉利支丹小説の片影と推定されてゐて、同博士は「純粹な吉利支丹文學書として殆ど日本に残つてゐた唯一のものらしい」とも言つて

居られるものであるが、同書には「頃は慶長九年二月中旬の事なるに、筑前の國博多にエキレンシヤありけるが、その時の住持をばヘルロマンと云ふなり。ユルマンの名をばニコラヲと云ひ、同宿の名をばイナツツと云ふ云々」と出てゐる。仍てこの記載を信ずるとすれば、慶長九年ごろではニコラオはもはや長崎の地を去つて筑前博多に居つたこととなるわけであるが、該書は前陳のごとく小説的構想を以て錄されし著作であるが故に、姑く之を不問に附するとするも、とにかく彼が當時わが國に存生して一部人士の間に熟知のものであつただけは確かである。斯くしてそののち凡そ十年間を専ら耶蘇會の文化的事業に粉骨碎心して經過したらしく、慶長十八年には再び彼を長崎に看出すことになるが、しかし吾々はそれ以後完全に彼の日本における動勢を見失ふに至る。惟ふに、彼は、慶長十九年十一月に於ける史上著名の大迫害に遭遇して、多數の教父教弟及び有力檀信の徒に伍し、また恐らくは媽港へと追放さるる謫者の中に加へられたが爲めであらう。なぜならば彼は既にも述べた如く元和六年と同九年のころ媽港に生活せる確證があるからである。

では、彼は、いつごろ日本に渡來したのであらうか。殘念ながら現在のところでは此の點極めて茫漠としてゐる。然し前掲利瑪竇の回想録にもみえる如く、わが天正十四五年のころ既に日本に在つて彩毫を執つてをつたとの證言があるのであるから、縦ひ西畫の法を邦人子弟に教授せし事實が文祿元年にしか實證されて居らぬとは云へ、文祿元年に先立つ天正十九年に西肥加津佐の耶蘇會學林より、現存最古の吉利

支丹宗門書サントスの御作業のうち拔書^{ボドレイ}と題する書が、銅版畫圖を以て裝はれ刊行されざる點を勘へ合せると、彼が天正三十四年の交すでに我が國に滯留せしものとするの推定は、至極蓋然性をもつものと言はざるを得ない。

近時、この件について、太田正雄博士所譯の天正十四年度の耶蘇會年報^{日葡交通第一輯所收原}から之を確認するを得た。年報の起草者はルイス・フロイスである。日本副管區長コエリヨの委嘱に本づき印度管區長ワリニヤーノに宛て書き送れるもので、西紀一五八六年^{天正十四年}十月七日の日附を示してゐる。乃ち副管區長コエリヨが同年三月六日長崎を發つて京畿及び豊後に赴かんとするに際し、隨行の諸人を列舉せし條下に、次ぎの如き記述が見えてゐるのである。

その時四人の師父、三人の伊留滿を隨へたまへり。師父としてはその同僚にして相談役たるルイジ・フロエス、或る重要な用件の相談の爲めにその頃堺より來り居りしフランチェスコ・バジオ、府内のコレジオの校長として赴くフランチェスコ・カルデロン、大阪のセミナリオの青年の世話をしに有馬のセミナリオよりそこに往くダミヤノ・マリノ、又伊留滿としては豊後のコレジオ並に^{カサロニオ}僧院の繪を作れる畫工ジョワンニ・ニコラ(Gio, Nicola)副管區長師父の同行たる日本人ダミアノ及び葡萄牙人アンドレア・ドリリアなり。但しこの旅行ではニコラオは病めるカルデロンを看護するため偕に下關に滞ることとなつて、爲めに京畿方面へは赴くを得なかつた模様であるが、それはとにかく、吾々は、右記述からニコラオが天正十四年のころには確かに來朝して居つたこと、當時彼が伊留滿すなはち修

道士たりしこと、豊後の學林と僧院に描畫の筆を揮つたことなどの新事項を承知する次第である。なほまた彼の名に冠して「畫工」と標記されざる點も注意せらる可きものであらう。ところでまたここに彼についての斷片的消息の一端が看出される。それは我が天正十八年にあたる西紀一五九〇年に媽港の耶蘇會から刊行されたエドゥアルデ・デ・サンデ所編の天正年間遣歐使節記の出版允許狀の一葉^{歴史と地理第廿五卷第二號所載泉井久之助氏譯文參照}に、ワリニヤーノ及びアントネースの名と共に拉丁型でニコラス・デ・アヴィラ(Nicolas de Avila)として彼の署名がしるされてゐることである。この允許狀には一五八九年十月四日の日附が示されてゐるから、從つて天正十七年の頃ではニコラオは媽港に在留してゐたことが判明する。按ずるに彼は巡察師父ワリニヤーノの九州三侯使節を帶同して歸朝するに際し、隨從して日本に歸還せるものと信ぜられよう。それゆゑに天正末期より文祿慶長に亘る日本初期洋畫の驚くべき發達に至大の貢獻を爲せる人こそは、疑ひもなくこの畫僧ジョヴァンニ・ニコラオである可き筈である。吾々は、彼の存在によつて、わが國に於ける西洋畫技の修得が、從來一般に布教の片手間仕事として、來朝教父の餘技に依り指導せられしかに印象づけられてゐたのが、その實、一個の卓技なる技倆をもつ有力の専門畫士に依つて誘掖指導されしことを了解することが出来る。これは傳存の諸種遺品に徴するも明瞭に容認し得るところで、その畫技設色たるや克く泰西の規矩に適ひ、正則の畫學教育を承けしことを餘蘊なく立證してゐる。宗教的畫題以外に風俗畫的題材を取扱へる諸作品、例へば既記

の松平家所藏騎馬圖屏風、細川家所藏風俗圖屏風の如きも、筆格また雄渾警拔を極めて、宛ら狩野派の蒼勁たる素描に復興期南歐畫派の絢爛たる布彩を以てせるがごとき印銘を與へる所以のものは、是れ素よりわが國人の比儔なき天稟の畫才に因るところ大なるものありとは云へ、その肉附けの描寫至妙にして、體積の精確なる表出といひ、被服の襞の巧緻なる取扱ひ方といひ、物象の強靱なる把握力といひ、凡そ拔群の力量ある南歐畫人の直指によるにあらずんば、決して斯くの如く短時日に、斯くの如く擒縱自在に、海西新渡の畫技を驅使して描破し得なかつたには相違ない。憾むらくはニコラオの畫蹟いま湮滅して地上に跡を絶ち、はたしてこれらの諸作が彼との合作に成るかどうかその適否を詳かにするを得ぬが、然しこれまたニコラオの法を得ておのづから一格を爲せるものたるは秋毫も疑ひを容れない。

四

以上縷記する所によつて、ニコラオがわが國に於ける西洋畫法の流傳に没すべからざる功績を残せしこと、日本耶蘇會の繪畫活動の中心となつて、わが國はもとより支那に於ける利瑪竇の布教にも寄與するところ尠くなかつたことなどが、ほぼ分明したこととおもはれるが、彼の門弟の一人でヤコブ丹羽 Jacob Nive 原文のNiveなる羅馬字綴りを日本名に復原することは多分の危険を含むが姑く假りになる一日本人畫家が、また入明して利瑪竇の許でその教團のために種々聖畫を描いたことも、閑却すべからざるものがあるであらう。

萬曆二十八年 慶長五年 南京から北京へ向ふの途次、利瑪竇は暫く齊寧 浙江都置、南兗州廣陵郡に屬し後ち廢せらる、いま江蘇江都縣東北六十二支里 に足を停めたことがあるが、そのとき彼は神宗帝に献上するため携行し來れる洗者聖ヨハネの陪侍せる聖母子圖の油繪を、同地の都督劉心同に示すの好機會を捉へた。ところが都督夫人はその繪の話の聽聞して大いに感動し、その模寫を所望して畫家の派遣を懇請したが、しかしながら利瑪竇らは「畫家がうまく描けないかも知れぬといふ危惧をもつてゐたばかりではなく、また種々の事情がそこに永らく留まることを許さなかつたので、都督に他の一枚の美しい模寫を與へた。その繪といふのは吾々の教團内の一青年が吾々の僧舎内で作つたものであつた」といふ事實 タクチ・ウエンチユリ師著利瑪竇傳第一卷三五〇頁 がある。この模寫に就いては、ラウファ博士の「支那に於ける基督教美術」にも若干所見が出てゐて、同都督が利氏より贈られし該畫像を恭々しく拜してのち、この畫像を不敬の眼でみることは出来ぬと云つて、平常、天を祭るために用意せる場所に高い壇を設らへ、香を焚き蠟燭に火を點じて禮拜した。そのとき利瑪竇は右の畫像を見上げてゐる都督の肩を叩き、彼に對つて、この御影は永遠のものではない、然し天と地とあらゆる被造物との偉大なる支配者こそは永世渝らざるものである、と語つたと傳へてゐる。ただし南京の僧舎に在つて描圖の筆をとつたと言はれるこの能畫の一青年の何人であるかは、正確には何ごととも傳はる所はないが、さりながら、やがてまもなく、利瑪竇は、北京において教弟ヤコブ丹羽なる畫人の繪畫作品による布教上の協心戮力を得ることになるわけである。

ヤコブ丹羽は、畫僧ジョヴァンニ・ニコラオの門弟にして優秀なる畫家であつた。ニコラオの場合と同じく其の遺作にして殘存せるものは、

今日尙ほ全く之を發見するには至らぬが、ヴェンチュリ師の記載ベリ「マテオ・リツチの時代に於ける支那の繪畫と版畫」所收に據つて述べてみると、彼は日本人と支那人との混血兒で日本生れである。幼にして耶蘇會所屬修學寮において教育をうけ頗る畫技に長じた。尤もその父にして支那人とすればその母

は日本人と解す可きであるが、かかる事例は慶長期にあつては必ずしも異例となすには當らぬものの如く、バジェス日本二十六聖人殉教記にも慶長二年の大致命に際し殉教せる一青年で、フランシスコ會遣外

主教代理ベドロ・バプチスタの問答者で彌撒答の役を務めしアントニオと呼ぶ長崎生れの混血兒も、父は支那人母は日本人であつて、初め

耶蘇會の修學寮で育てられたものであると云はれてをり、慶長十九年肥州口之津における殉難者中生存せし者のうちにも斯例を見ることが出来る。丹羽が、描畫の術に通達せしことはトリゴールも語るところ

で、諸書みな之を傳へるが、後年、その製作は媽港、北京、南昌の各地に及んでゐる。仍て巡察師父ワリニヤノは其の非凡の畫才に着目して彼に托するに此の仕事の分野に於いて耶蘇會の支那傳道を手助け

することを以てしたのである。さういふわけで丹羽はワリニヤノによつて慶長六年の終り頃か、もしくは翌七年の初頭ごろかに日本から

媽港へ呼び寄せられたのだと信せられてゐる。時恰かも萬曆二十九年

慶長 再び燕京に入府せる利瑪竇は、これより先き在支教團の學頭に任
六年 せられてゐた長老エムマヌエル・デアズ

漢名李瑪諾、葡萄牙ボルトレール、
教區のアスバルハムの人、萬曆二十

日本耶蘇會の繪畫活動と明末支那の洋畫

七年 來華の命によつてたまたま南方傳道團の中に補せられたので、そこで

デアズ長老は利瑪竇と商議するため萬曆三十年慶長七年北京に赴くことになつた。このデアズの北京への最初の訪問に際し、ヤコブ丹羽もまた

伴はれて北京に行つたのである。彼等は同年の七月道途恙なく水路によつて北京に到着した。しかしながらそのころの丹羽は未だ正式に耶

蘇會へは這入つてをらなかつたらしい。ヴェンチュリ師はその利瑪竇傳の註解で「西紀一六〇四年慶長九年一月二十五日附の名簿に擧げら

れし當時支那に在留せる教父教弟の連名中には、ヤコブ丹羽の名が全

然見當らない。然しこの沈黙は別に不審がるには及ばぬ。予が屢々引

用し來つた利氏の「回想録」にも、萬曆三十年慶長七年の交では丹羽がま

だ教團に入らなかつた旨を記載してゐる。故に前記一六〇四年一月二

十五日附の在支耶蘇會士名簿が、彼について一言半句も述べて居らぬと云ふのは、則ち丹羽に對するその當時の状態が二年前の萬曆三十年

の状態と何ら變化のなかつたことを意味するものに過ぎぬ。利瑪竇よ

り耶蘇會總長クロウジオ・アクワヴィイワに宛て書き送つた西紀一六〇

六年慶長十一年八月十五日附の書翰も、教弟丹羽を mezzo giappone

(混血日本人)であると云つて、同年一月二十日に突發せるワリニヤノ

の媽港での急逝までは未だ耶蘇會に入會してをらなかつたことを示してゐる」と語つてゐる。斯様にして數年間、丹羽は利瑪竇の許でその

善行と熱意とを實地に示してのち、耶蘇會に入會をゆるされる筈であるが、ルイ・ヒスター師編著の在支耶蘇會士刊行經書志上民國廿一年海刊には、

この丹羽の耶蘇會入會を西紀一六一〇年慶長十五年に置き、猶ほロンゴ

バルデイが西紀一六一二年慶長十七年 萬曆四十年耶蘇會總長宛の書翰において「平時にあつても戦時にあつても戒律を正しく守り、非常なる勇氣をもつて己が職責を堅持した」と述べたところの丹羽その人の徳行の一節を援引して、彼が補祭たちの模範的人物であつたことを告げ、「なほまた當時に於いては補祭たちが八年乃至十年の傳道行爲の功を積むことなくしては、修道士たることの斯かる榮譽は貰へなかつたのである」とも説明してゐるよしを述べて居られる。ヒスター師の論據となれるものは右のロンゴバルデイの書翰であり、ロンゴバルデイ華名龍華民、伊太利亞シシリ島の人は萬曆二十五年慶長二年廣東省潮州に入り、萬曆三十七年慶長十四年北京に入府して利瑪竇の歿後耶蘇會の北京管區長となつた人であるから、その記述は十分信用するに足り、従つてヤコブ丹羽は利瑪竇示寂と同年にあたる萬曆三十八年慶長十五年はじめて伊留滿と爲つて僧籍に入るを許されしものに相違なきことが分るであらう。

さて、然らば、ヤコブ丹羽は、支那における利瑪竇の教團にあつて抑も如何なる繪畫上の活動をこころみたのであらうか。この問題に關聯して、現在われわれの持つところの資料は極めて不充分たるを免れぬが、いまヴェンチュリ師が調査せられし若干の記録を寄せ集め、之に聊か私見を加へてその大概を髣髴することにしよう。

丹羽に關する根本資料として最も重視すべきものは利瑪竇の書翰であるが、しかしこれとても固より甚だ斷片的で僅かに彼の片鱗を窺ふに過ぎぬが、とにかくその二三を擧げてみると、乃ち西紀一六〇五年慶長十年 萬曆卅三年二月附のルイ・マゼリー教父宛通信で、利瑪竇は「昨年の復

活祭の祝典のため日頃祭壇上に安置してあつた救世主の畫像を撤して、その代りに聖路加を伴へる聖母子圖の新しい畫像をおいた。それは一青年の手で物されしもので非常に巧なる出來榮えを示してゐた。畫者は吾々の教團にゐる者で、日本に於いて師父ジョヴァンニ・ニコラオ原文はGiovanni Niccolòとありの門弟であつた。猶ほまた總てのものが此の畫像について持つところの悦びなるものは測り難いものがあつた………」と述べてゐる。この一青年がヤコブ丹羽であることは茲に改めて囁々する必要があるまい。また同じく利瑪竇のアクワヴィワ總司教宛西紀一六〇六年慶長十一年 萬曆卅四年八月十五日附書簡からも、ヤコブ丹羽が當時媽港に居ること、並びに利瑪竇が彼をしてその地の新天主堂に二三の繪を描かしめるため派遣したのだといふことなどを知ることが出来る。

媽港の新天主堂といふのは、寺號を聖パウロ寺と稱し、支那側の謂ゆる首三巴寺にあたる。道光十四年天保五年火を發して烏有に歸し、現在はたゞ該建造物の前面のみを残してゐるが、本來ここには古くから天主堂が建つてゐたのであるが、それが萬曆二十八年慶長五年に焼亡したので、直ちに工を起して再建に着手しユングステッド支那に於ける葡天主堂西隅の礎石に西紀一六〇二年據付の火災の翌々年葡萄牙人植民地の歴史的概観にはが竣工をみた。これ乃ち謂ふところの新天主堂である。この再建の新天主堂の建築設計が、元和八年長崎にて壯烈なる殉教の死を遂げたカロロ・スピノラの手に成れることはバジェスの日本基督教史にも見えてゐるがモンタルト・デ・ゼブスの媽港年代記一九〇二年 香港刊に據れば、わが慶長六年から同七年の頃にかけて多數の日本人教徒がその再建工事に協力し

たといふことである。慶長六年の末頃ワリニヤノの命によつて丹羽がはじめて媽港に渡つたのも實にこの新天主堂を裝飾せんがためであつたのである。そこで、吾々は、右の利瑪竇の書翰の記事を通じて、彼が再び媽港を訪れてそこで若干の製作を試みたことを承知する次第である。但し利瑪竇はこの媽港に於ける丹羽の仕事の内容に就いては何ごとも語る所がない。乾隆十六年の序記を示す澳門紀略の撰者も、新天主堂を敘して「首三巴寺在澳東北。依山爲之。高數尋。屋側啓門。制狹長。石作彫鏤。金碧照耀。上如覆幔。旁綺疏瑰麗。所奉曰天母。名瑪利亞。貌如少女。抱一嬰兒。曰天主耶穌。衣非縫製。自頂被體。皆采飾畫障。以琉璃望之如塑」といひ、また諸廟を敘せる條下で「凡廟所奉天主。有誕生圖被難圖飛昇圖」とも語つてはゐるが、それらのうち如何なる描圖が丹羽の毫端にかかるものか一向に判然しない。

然し、幸ひなることには、媽港の會堂の焼失とその再建を報せる西紀一六〇二年慶長七年正月廿五日附教父カルワリヨ―彼は當時媽港の學頭であつた―の一六〇一年度支那年報ベリオ氏前出書所引、原本巴里國民圖書館所藏、一六〇五年巴里刊、原題は「耶穌會總長アクワヴィイワ宛下宛媽港學林長ヴァレンタン・カールワリヨ師によりて錄されし一六〇一年度支那年報」であるから、ヤコブ丹羽が媽港で描いた聖畫について、左のごとき一節を發見することが出来る。同年報は言ふ。

焼失せし二枚の繪の代りに、新規に別の二枚を作れり。一枚は聖母被昇天の圖にして教會の奉獻せしものに係る。他の一枚は一萬一千の處女の殉教圖なり。これらは日本人の畫家の筆にして、吾々が同宿(Dosso)と呼べる者にて、豫てワリニヤノ師が支那に滯留せる吾々の許に送り越せし人にてありき。同師は彼に數種の作畫を依囑し、且つそれらの繪畫が新し

日本耶穌會の繪畫活動と明末支那の洋畫

く改宗せる支那人に對し、從來存在せる種々の偶像に代らんことを所期し給へり。この同宿は案に違はず立派なる腕前をもち、描畫の技術に通達せる青年なりき。その繪は甚だ美麗にして完成せるものとして眼に映ぜり。支那人らも非常に喜びたり。

この年報に現はれてゐる日本人畫家で「同宿」と呼ばれた青年の何人であるかは、最早語らずとも明々白々であらう。それは、ヤコブ丹羽が、慶長十五年の頃に至るまで、修道士たるの資格を持たなかつたといふ前掲記載ともよく照應してをり、また同宿なる語は、一般には日本人の姓名に冠して、修學寮生徒もしくは修練所生徒と同義に用ひられて、伊留滿すなほち修道士と爲るの豫備的段階に在る者を意味するからである。元來は、佛教用語から抄取し來つたもので、アジウダ文庫未刊書中「同宿及びその資格、日本にては如何に必要なものなるかに就て」の一項を含む記述岡本良知氏譯フレイタス氏初期耶蘇教徒編述日本語學書研究參照のうちにも、同宿とは日本の寺院では將來僧侶たらんがために髪を剃り、正式の僧侶の着用する法衣とはやや異なる寛き僧衣を纏ひ、各寺院に養はるる若者を言ふとの定義を下せるにつきてみるも瞭かである。猶ほまた右年報の記事に關し特に注意すべき點は、ヤコブ丹羽が媽港駐錫中のワリニヤノによつて媽港へ招致せられしものでもなければ、また帶同されて媽港に赴きしものでもなく、實に在支耶穌會の依囑に應じてワリニヤノの命で日本より派遣せられしものであつたといふ一事である。それゆゑに丹羽の媽港への最初の訪問は、ワリニヤノの媽港到着にやや先ずるものと言はざるを得ない。仍て彼はこれらの繪畫を新天主堂に仕上げて後ち、いくばくもなくしてデアズに隨行して北京

にゆき、其後ふたたび媽港に現はれて作畫に従事せしこととなるが、この二度目の媽港訪問に際し彼の描ける繪畫に就いては、吾々は何ら聴くところがない。

五

ところで、またここにポール・ペリオ教授は、其の利瑪竇の時代に於ける支那の繪畫及び版畫（一九二一年刊の一書に於いて「利瑪竇の失はれたる書翰の中には、もつと廣汎なる記實があつた筈である、そのわけは教父ド・ジャリツクがヴェンチュリ師の記事に抜けたとおもはれる箇所」に於いて、教弟丹羽の功績を相當長々と讃えてゐるからである）と云つて、ジャリツク教父の西紀一六一四年（慶長十九年、萬曆四十二年）ボルドウにて刊行せし「より一層記憶さる可き歴史の第三部」(Troisième partie l'Histoire des choses plus memorables)と題せる書の一節を擧げてをられる。原文は古體の佛文にして甚だ難解であるが、その大意を抄出するならば次ぎの如くである。

西紀一六〇五年（慶長十年、萬曆卅三年）のころ、北京(Paquin)の都府には教父利瑪竇(P. Mathieu Ricci)と教父龐迪我(P. Jacques Pantoja)と及びジャック・ヤコブ(Jacques)と呼ばれて、優れたる畫家で、同じく耶穌會の日本人の一教弟とが居つた。その教弟は彼の繪を以てこの支那の全社會からの賞讃を博してゐた。教父利瑪竇もその書翰の一つで、支那では彼の繪畫に優るほどのものはない。彼の手から生れ出た繪に比べては、支那人たちが探つて以て以前無上の價值あるものと考へた繪畫にしても顔色がないほどである。それは未だ嘗て支那人たちが所有したことのないものであると語つ

てゐる。つねに彼は非常に秘かに仕事をしてゐたので、二人の支那人教徒で極めて篤實なる者のみが、それを詳悉して居つたに過ぎなかつた。何故といふに、彼の繪の仕事が王(神宗帝)の注目とするところとなつたならば、王もしくは王の宮廷の大官達の依頼畫のみに使役される惧れがあつたからである。輒ち數人の者を怒らせる危険を冒すと同時に、猶ほ且つ萬人をも満足せしめ得ぬことになるわけであつたからである。

なほまた教父トリゴール（華名金尼閣また尼各、佛蘭西の西境、西部フランドルに屬せるドウエイの人、萬曆三十八年、即ち慶長十五年入支、かの大秦景教流行中國碑の最初の報告者として知られてゐる）の西紀一六一〇年度支那年報（ヴェンチュリ頁ペリオ氏には、教弟丹羽が、同年、教團所屬の二つの聖堂内に救世主と聖母の像を描くがため、江西省の南昌府に派遣せられし旨を述べてあるとのことであるが、これは疑ひもなく利瑪竇の歿した同年、即ち萬曆卅八年、五月十一日より少し以前のことであつたと信ぜられる。その理由としてペリオ氏は「利瑪竇は己が畫像を描かせることを少しも肯んじなかつた。然し支那人教徒は彼等が聖人と呼んで尊敬してゐた利瑪竇の死を悲しむの餘り、幾度も幾度も歎願してやつと繪事に通ずる教弟の一人に無理に其の像を描かせ、以て彼等一般の慰めとした。ウルシス（華名熊三拔、萬曆卅五年來華、布教の傍ら多數の科學上の述作を公にせり）の書翰によると、その幾分繪事に通せる教弟といふのはエムマヌエル・ペレイラ（姓氏不詳、華人にして媽港入り、利瑪竇らを助けて布教に従であると曰ふことである。もしも教弟丹羽事し崇禎三年壽五十六を以て歿す）が當時北京に居つたならば、もちろん彼に依頼されたに相違ないからである」と云つて居られる。従つて丹羽は利瑪竇の歿せし當時では南昌に行つてゐて、北京には居らなかつたものの如くである。

最後に、いま一つ丹羽の勞作に關し、ペリオ教授も指摘してゐられ

る新事項を擧げておかう。それはトリゴールの西教徒支那遠征記佛譯本に見える利瑪竇の墓所の内部裝飾に就いてである。墓所は北京の城西阜城門外一名平則門外を去る二支里の溝村滕公柵欄兒に在り、現今俚俗呼んで石門となすが、本來は楊といふ宦官より沒收せるところの寺院を、利氏の死の翌年その墓所として神宗帝より敎團に賜はりしものである。仍て寺内の佛像佛畫を取り去り、これに代るに適當なる基督敎的裝飾を以てする必要があつたので、恰も好し當時北京に歸還せるヤコブ・丹羽を選んでその仕事に従事せしめることとなつたわけである。トリゴールは言ふ「祭壇が改めて設けられ、内壁の佛畫は石灰をもつて蔽はれた。新しい祭壇の上には救世主の畫像が安置された。吾々の敎弟の一人が同じ寸法で非常に正確にその繪を模寫してゐる。それでみると吾々の救世主であり贖主であるところの基督が、立派な王冠を戴いて聖座に崇められ、天使がその上を飛翔し、使徒たちは基督の兩側にやや低く陪侍して、基督の説くところに耳傾けて何ごとかを聴くが如き圖である」。帝京景物略卷五西城外の利瑪竇墳の條下に「墓前堂二重。祀其國之聖賢。堂前晷石。有銘焉。曰。美日寸影。勿爾空過。所見萬品。與時併流」と云へるもの、乃ちこの敎弟丹羽の祭壇畫を以て飾られし天主堂を指すのであらう。惜しい哉この墓所、曩の義和拳匪の徒のため攻掠されるところとなつて、該畫像また壞滅に歸した。

右に擧げた同世者たちの諸記録は、すべてみなヤコブ・丹羽が非凡の畫家であつたことを語ることに於いて一致してゐる。じつさい丹羽の描いた聖畫が、別して民族的自尊心の強い明季の支那人士のところを

捉へたのは、一見いかにも奇異の感に打たれはするが、さりながらそれが眞實であつたことは、夥しい訪客が丹羽の繪を見物するため敎團を訪れてきたといふ利瑪竇の證言西紀一六〇八年八月廿二日附アックワビイワ宛書翰ヴェンチュリ第二卷所引が何よりもその證據ではないか。さうして斯く其の描畫が著るしい魅惑を支那人に與へた所以のものは、蓋し西畫の陰影や遠近の法則が、その色彩法と共に彼等の眼に清新生動の姿をとつて映せしが故であらう。張庚の國朝畫徵錄には西畫の手法を「然非雅賞也、好古者所不取」といつて之を斥けながらも、猶ほ且つ「明時有利瑪竇者。西洋歐羅巴國人。通中國語。來南都。居正陽門西營中。畫其敎主。作婦人抱一小兒。爲天主像。神氣圓滿。采色鮮麗可愛」と語り、胡敬の國朝院畫錄また「海西法善於繪影。剖折分判。以量度。陰陽向背。斜正長短。就其影之所著。而設色。分濃淡明暗焉。故遠視。則人畜花木屋宇皆植立。而形圓」と載せたるが如きは、みな這般の消息をつたへて餘蘊なきものがあるであらう。利瑪竇もその回想錄の中で「凡ての支那人は繪畫の友である。しかしながら吾々の藝術家の域には未だ至つてはゐない。支那人は彫像や鑄金の如きものを使用するにも拘らず、斯かる術には缺けてゐる。手先の器用や天分はあるが陰を置くことを知らない。あらゆる繪が死んでゐる。權衡とか整正とかを知らない。青銅よりも石造にて大作を爲す」と述べてをり、西紀一六〇五年慶長十年萬曆卅三年五月十日附ジョヴァンニ・バプチスタ・リツチ宛その書簡の一節にも「嘗て支那人たちは畫像の書冊を一見して、茫然自失し、その畫像が彼等をして彫刻とおもはしめて、繪であるとは考へることが出来なかつた」

と報じてゐる。この支那人の繪畫の立體性に對する感覺の缺如が、恐らくは丹羽の繪をして名を成さしめたる所以であるのであらう。

最近、岩生成一氏は媽港のゼスス會コレジオに於ける日本人について歴史地理第七十一卷第五號所載と題する一文において、リスボンのアジュダ文庫所藏日本初期吉利支丹資料の文書中「在媽港コレジオ及び同コレジオ所管交趾支那傳道にあるボードレ及びイルマン等第三回名簿。付第一及び第二回名簿補足。一六一八年六月作成」の表記を示す人名簿の存在を紹介せられ、該名簿の日本人修道士二十一名のうちに「イルマン・丹羽ヤロベ (Nira Jacobe)」の記載されざることを指摘されて居る。これで見ると、わが元和四年の頃では教弟丹羽は媽港に在つたことが分明する。然らば當時媽港にあつては丹羽の師ジョヴァンニ・ニコラオも在留してをり、バジエスに據れば、肥後宇土の人で我が國の天主堂の大部分を裝飾せりと傳へる、名をマンシオ・タイチコ (Mancie Tai-chico) と呼ぶ優秀なる畫家西紀一六一六年元和二年一月媽港にて他界、行年四十一の如きも、媽港に滞留することとて、元和初年では、日本吉利支丹畫派の中樞勢力は概ね媽港に移れるものと斷じ得可く、察するに當時日本にあつては教父教弟の殉教相次ぎ、支那にあつては南京禮部侍郎沈淮の上疏して異教の人心に淫浸するの弊を説き、ために第一次迫害の起るあつて諸省在留教父の媽港に遁竄するもの踵を接せしが如き事情に負う所ありと、想はれるが、いづれにしても、これらの諸畫人がおのがじ蘭菊の美を競ひつつその妙技を振へる媽港新天主堂の裝飾こそは、想察するだけに心琴の高鳴るを覺えしめる。然るに爾來幾春秋星移り物かはつて、

彼等の遺作は總て灰燼に歸して今日これを尋ぬるに由なく、モンタルト・デ・ゼズスが其の媽港年代記に記載せる亡失せし大村純忠時代の長崎港圖もと媽港の上院に所藏されしもので、家屋は歐羅巴様式を示し堡壘には葡萄牙國旗の懸へる状を描寫せりと傳ふの如き、慶長二年の大殉教圖もと媽港のサンタ・クララ寺に所藏され、その繪の前に主禱文と天使祝詞を誦する者には媽港の主教から四十日間の赦免を與へられしと傳ふの如き、さてはユングステッドの支那における葡萄牙人植民地の歴史的概觀一八三二年媽港初刊に見えて居る、媽港對岸の一小島青州の地に、萬曆三十二年頃ワリニヤーノがカルワリヨと協力して、支那官憲の許可なくして建造せし天主堂内の祭壇畫、聖ミカエル像ユングステッドによると支那人は該天主堂を砲臺と誤認し、西紀一六〇六年青州に渡り右堂舎を燒燬した際、聖ミカエルの畫像もまた厄に罹り支那人の手で引裂かれたと傳へる。明史佛郎機傳に「至萬曆三十四年。又於隔水青州建寺。高六七丈。闕徹奇闊。非中國所有。知縣張大猷請毀其高壙。不果」とあるのは、再建の青州天主堂を指すもので、この再建天主堂は、同書に熹帝の天啓元年監司馮從龍等によつて全く破却されるに至つたことが見えて居る。の如き、また恐らくは叙上の媽港におけるニコラオの畫派の手に成るものであつたであらうが、完全に吾人の眼界から消失し終れる現在では、彼等の在りし日の流風を彷彿たらしめくれる遺品としては、ひとり之を我が國にのみ求めることの出来る喜びはまた以て聖代の餘澤と謂ひつ可しである。

(本稿は日本學術振興會補助による研究の一部である)